

はじめに

人口の都心回帰が見られる一方で、地域力の弱化も静かに進行している。背景には少子高齢化や社会・経済のグローバル化を背景にした、世帯の小規模化や多様化と、それらがいまって引き起こされる地域での暮らしの孤立がある。そこで改めて注目を集めているのが、地域における「ソーシャル・キャピタル（社会関係資本）」の力である。ソーシャル・キャピタルとは、信頼や規範によって支えあ

ムとして取り組んだ、建物1階小スペースのガラス・ウォール（ウィンドウ）を活用した、地域資源にまつわる3つの展示と関連イベントを紹介している。続く第13話・14話では、U-CoRoプロジェクト1年目の段階における、NEXT21入居者へのアンケート調査と、展示やイベントに協力くださった地域の方々等へのヒアリング調査の結果から、地域資源と人的資源の交流を促すコミュニティ・エンパワーメントの可能性について考察している。

始動期の2つの調査から、展示やイベントのプロセスに関わり情報提供の主体となった場合には、新たな思考や行

弘本 由香里

written by Yukari Hiromoto

大阪・上町台地発
都心居住文化の創造へ

(第15話)

ソーシャル・キャピタルの形成へ(1)

— なにわ伝統野菜を媒介に、 経験の共有とネットワークの可視化

うネットワークや生活文化とでもいうべきものである。

そのような社会の動向と課題を探りながら、当連載では一貫して、個人と地域の関係結び直すための、地域資源を活かしたコミュニティ・エンパワーメントのあり方を問い続けてきた。そして、当連載第12話〜14話では具体的な場を活用した実践研究として、大阪の都心部・上町台地に立地する大阪ガス実験集合住宅NEXT21での、地域コミュニケーションデザイン実験「U-CoRoプロジェクト」の始動期の概要と評価をレポートしてきた。

第12話では、U-CoRoプロジェクト1年目のプログラ

動、ネットワークの拡張の兆しが生まれやすいのに対して、主として情報の受け手のみの立場にある場合には、意識の変化の次の段階に至る前に見えないハードルがあることを推察することができた。情報の受け手から情報提供の主体への転化を可能にする、インターフェイスとしてのプロセスを創造していく必要性を認識することとなった。

U-CoRoプロジェクト2年目のプログラムでは、1年目の評価をふまえて、プロジェクトの背景やプロセスの可視化による関心の喚起と、参加のインターフェイスとコミュニケーション手法の多様化による能動的な関与の

可能性の拡大を、新たな仕掛けとして組み込んでいる。今回第15話では、2年目のプログラムの中から、第5回「上町台地となにわ伝統野菜物語」(2008年5月19日～8月29日 9月12日まで展示延長)のウィンドウ展示と連動企画を核にしたネットワーク拡張の仕掛けについて紹介しながら、一連の動きが物語る意味を考えていきたい。

ネットワーク拡張の仕掛けを組み込む

2年目の課題として設定した、プロジェクトの背景やプロセスの可視化による関心の喚起、参加のインターフェイスとコミュニケーション手法の多様化による能動的な関与の可能性の拡大。この2つの課題に添えていくには、能動的参加を誘発しやすいテーマ設定と、ネットワークを実感する仕掛けが必要となる。また、1年目に築いてきたネットワークと地域資源の蓄積を強みとして活かし発展させていくと同時に、1年目に築けなかったネットワークの弱みを補完していくことも重要なミッションとなる。

それらの条件から導き出されたのが、ウィンドウ・エキジビション05「上町台地となにわ伝統野菜物語」である。「なにわ伝統野菜」(1)と(2)という入り口は、農業、環境、食文化、歴史など、実に幅広い関心を受け止め、子どもから高齢者まで、あるいは一般市民から専門家まで、世代や立場を越えて思いを集める大きな包容力を持っていることが、テーマ設定の決め手である。また、NEXT21の近隣に広がる玉造界隈は、なにわ伝統野菜のひとつ「玉造黒門越瓜」(たまつくりへるまんにしうり) (3)のふるさとという地の利もあつた。さらには、玉造黒門越瓜の地元での復興に力を注がれている玉造稻荷神社・玉造黒門越瓜出隊の関係

者とU-CoRoプロジェクトとの良好なネットワークも、これまでの取り組みを通して既に形成されているという、何よりの強みがあつた。

テーマの包容力と地の利とネットワークの強みを活かしながら、1年目に築けなかつた弱みを補完する部分では、地域の学校・幼稚園等との関係を築いていくことと、NEXT21入居者自治会の積極的な関与を可能にしておくことに力を注ぐことを目標とした。そして、参加者がプロジェクトの背景やプロセス、ネットワークを実感できる仕掛けとして取り組んだのが、展示と連動する形で展開した「玉造黒門越瓜栽培プロジェクト」である。共催者として玉造稻荷神社・玉造黒門越瓜出隊から種や苗を提供いただき、社寺や幼稚園・小学校・高校や商店等の任意の参加を得て、上町台地界隈の各所での栽培にチャレンジした。その様子をビジュアルな壁新聞型のニュースレターにまとめて発信し、収穫の時期に栽培報告会を開催することなどを通して、参加者による経験の共有とネットワークの可視化を試みている。

以下にそれらの動きを具体的に伝えながら、次のステップに向けた展開の可能性にも触れていきたい。

なにわ伝統野菜をめぐる人と物語への着目

ウィンドウ・エキジビション05「上町台地となにわ伝統野菜物語」(図1) (2)の特徴をつかんでおくために、企画趣旨と展示内容を概観しておく。同プロジェクトを担当している、筆者による資料から抜粋紹介する。

企画の趣旨

(前略) 初夏から夏へ、太陽の光を受けて、生き物が



図1 U-CoRoウィンドウ・エキジビション05「上町台地となにわ伝統野菜物語」フライヤー

輝きを増す季節、ウィンドウ・エキジビション第5弾では、上町台地となにわ伝統野菜物語」をご覧いただけます。並行して、上町台地界隈の各所で、玉造黒門越瓜栽培プロジェクトも進行しています。

風土が育む地野菜の、個性あふれるその姿形や、しつかりとした味わいには、まちの歴史と文化が詰まっています。今、なにわ伝統野菜があちこちで息を吹き返しています。上町台地がふるさとの、玉造黒門越瓜や天王寺蕪も、まちの人たちの願いを受けて、芽を吹き、根を張り、花を開き、実を結び、たくさんの物語を紡ぎだしています。その輪の広がり、命を支える食と暮らし、まちの未来への思いを重ねて、お味わいいただけましたら幸いです。

主催：大阪ガスエネルギー・文化研究所(CEL)

企画：U・CoRoプロジェクト・ワーキング

協力(取材・資料提供等)：味原幼稚園、上町台地からまちを考える会、大阪市農業センター、大阪城天守閣、追手門学院大手前中・高校、應徳院、岡本真澄さん、小田切栄子さん、からほり倶楽部、高津高校、五条小学校、真田山幼稚園、清水谷高校、惣、空畑クラブ・谷町空庭、玉造稲荷神社、玉造黒門越瓜出隊chana、浪花漬四天王寺、西むら、西代官山クラブ、NEXT21入居者自治会(有)富士原文信堂、萌、松本皓市さん、森下正博さん、結 レストランRire、練、そのほかのみなさま(50音順)

主な展示内容

復活してきたなにわ伝統野菜

(地野菜を育む産地と食文化)

大阪の肥沃な土が育んできた地野菜の数々。都市

化のなかで、いったん姿を消していった地野菜が、なにわの伝統野菜として各地で息を吹き返しつつあります。大阪の食を支えてきた、なにわ伝統野菜の個性豊かな姿と本物の味わい。風土が育むなにわ伝統野菜の価値、品種・産地情報など、マップとともにご紹介。

上町台地となにわ伝統野菜

(食・農の営みと上町台地の変遷)

かつて大阪・上町台地の食と暮らしは、周辺の豊かな農地と営農によって支えられていました。都市の拡大とともに、暮らしを支える食と農の関係は切り離されて、地野菜づくりの風景も遠ざかっていってしまいました。上町台地の古地図や絵図を紐解きながら、なにわ伝統野菜のありようとまちと暮らしの変遷を振り返ります。

体験！玉造黒門越瓜・天王寺蕪

(「広がる人の輪と味わい」)

上町台地がふるさとのなにわ伝統野菜といえば、「玉造黒門越瓜」と「天王寺蕪」。栽培を楽しむ人たちが、おいしい料理やお漬物やお菓子を創作する人たちが、神社から、学校から、お店から、農家から…、たくさんの取り組みの輪が広がる様子などをご紹介。上町台地界隈で同時多発進行中の玉造黒門越瓜栽培プロジェクトのレポートも。

なにわ伝統野菜の由来・特徴・いろいろ

玉造黒門越瓜や天王寺蕪はもちろんのこと、その他のなにわ伝統野菜の数々も含めて、その由来や特徴、おいしい食べ方などをご紹介。小学生がつくった歌や、むかしむかしの俳句なども。



図2 U・CoRoウィンドウ・エキジビション05
「上町台地となにわ伝統野菜物語」展示風景

同企画の大きな特徴は、なにわ伝統野菜の情報を知識として提供することよりも、むしろ人とまちの対話を豊かに育んでいく媒体としての価値を、なにわ伝統野菜に見出している点にある。なにわ伝統野菜をめぐる人の営みにメイン・スポットを当て、人が紡ぎだす物語を伝えながら共感を醸成していく方向性である。

NEXT21周辺・上町台地界隈は、なにわ伝統野菜との出会いから魅力的な活動を繰り広げている方々の宝庫でもある。境内の一角に瓜畑を設けて玉造黒門越瓜の地元復活を成し、夏祭りには瓜出隊による「玉造黒門越瓜食味祭」も開いている玉造稲荷神社の鈴木伸廣さん。玉造稲荷神社の向かいにある「レストランRire」では、シエフの中山雅雄さんが神社の鈴木さんとの出会いをきっかけに、伝統野菜の持ち味にこだわった料理を創作している。清水谷高校では家庭科クラブの生徒たちが、瓜出隊メンバーの長谷川寧子さんと協働で越瓜クッキーを開発。直販売を手がけ、ユニークな立体菜園も考案している。ピルの屋上でカフェ「谷町空庭」を営む、緑のプランナー・山内美陽子さんは、都市の中で野菜づくりや農的くらしを楽しむ「空畑クラブ」を運営。瓜出隊や空畑クラブの縁者をはじめ、家庭での伝統野菜づくりの楽しみは静かに広がりを見せている。また、四天王寺の門前では、「浪花漬四天王寺・西むら」を構える西村孝さんが、個性豊かな伝統野菜の姿と味を見事に活かした漬け物をつくり高い名物となっている。こうした取り組みの数々を長年にわたりにあたたかく見守り応援してきたのが、元大阪府立食とみどりの総合技術センター研究員で農学博士・なにわ伝統野菜応援団員の森下正博さんである。

こうした方々が紡ぎだす物語の輪の重なり合いや響き合いを描きだしていくことによって、人と人、人とまちをつ

なく媒体としての、都市における伝統野菜の新たな可能性が浮かび上がってくるのである。

つながりの媒体としての なにわ伝統野菜

個人と地域の関係を結び直す、地域資源を活かしたコミュニティ・エンパワーメントのあり方を考えるとき、なにわ伝統野菜という媒体が都市において強い潜在力を有していることを人と物語の連鎖の中に察知することができた。そのなにわ伝統野菜を入り口に広がっていく人の輪に、参加しながら実感していくことができる経験の共有とネットワークの可視化が、コミュニケーションデザインのポイントとなる。そこで取り組んだのが、前述の「玉造黒門越瓜栽培プロジェクト」である。

また、なにわ伝統野菜というテーマ設定は、環境との調和をテーマに建物緑化に力を入れ屋上やバルコニーにふんだんな緑地空間を持つNEXT21の場としての潜在力や、そこに暮らす入居者のコミュニケーションをエンパワーメントする役割も果たした。1年目には入居者の中に希望がありながらも実現には至っていなかったという屋上菜園が、この話題を追い風として、一気に実現に向けて動き出し、入居者自治会による屋上菜園が誕生し、野菜づくりを通して子どもたちを含めた入居者間のコミュニケーションが豊かに広がりを見せていった。

栽培プロジェクトの参加団体・施設等は約

- 1号(6月7日)
「なにわ伝統野菜応援団森下正博先生と上町台地玉造黒門越瓜栽培ポイント巡り」
- 2号(6月24日)
「玉造稲荷神社さんで早くも玉造黒門越瓜の初収穫」
- 3号(7月初旬)
「NEXT21で続々収穫間近情報」
- 4号(7月15日)
「玉造稲荷神社の玉造黒門越瓜食味祭でくろもんちゃん大活躍！」
- 5号(7月中旬)
「NEXT21の家庭菜園で玉造黒門越瓜を収穫！」
- 6号(7月27日)
「NEXT21 屋上菜園・各階プランターほかで、なにわ伝統野菜の収穫祭&BBQ」
- 7号(8月10日)
「夏のなにわ伝統野菜物語 越瓜トークとツルつなぎレポート」

表1 上町コロコロ新聞
しろりりNews 1~7見出し



図5 上町コロコロ新聞
しろりりNews 6(7月27日)



図4 上町コロコロ新聞
しろりりNews 2(6月24日)



図3 2008年夏 上町台地 玉造黒門越瓜栽培マップ

20件で、NEXT21入居者自治会、追手門学院大手前中・高校、谷町空庭・空畑クラブ、レストランRiRe、清水谷高校(ハンドメイドクラブ)、高津高校(家庭科クラブ)、お屋敷再生複合施設「縁」、長屋再生複合施設「憩」、地域交流スペース「結」、文化複合施設「萌」、真田山幼稚園、味原幼稚園、五泉小学校、應典院、藤次寺、玉造稲荷神社、大阪府教育センター、その他に個人宅が複数参加している。栽培地点を地図上にプロットし、空間的な広がりやつながりを感じとりながら、見学可能な施設を巡って楽しむこともできるように、「2008年夏 上町台地 玉造黒門越瓜

栽培マップ」(図3)として展示し、リーフレットにも掲載している。

また、2008年5月19日〜8月29日 9月12日まで展示延長 までの展示期間中、栽培プロジェクトでの出来事や関連情報を共有するツールとして、「上町コロコロ新聞 しろうりNews」を作成し、1号〜7号まで発行している(図4〜6)。各号の主な内容(見出し)を見ると、一連の動きが伝わってくる(表1)。



図6 上町コロコロ新聞しろうりNews 7(8月10日)



しろうり News 7号(8月10日)は、栽培プロジェクトの実りがピークを迎える時期に合わせ、栽培報告会を開催して開催したイベントの様子を伝えるものである。栽培プロジェクトの指南役として応援メッセージを投げかけてくださった森下正博さん、歴史の専門家の目で都市と農村の関係を振り返り、まちと暮らしの再生への思いを語ってくださった大阪城天守閣の北川央さん、2人のメッセージに続いて、谷町空庭・空畑クラブ、文化複合施設「萌」、大阪府教育センター、NEXT21入居者自治会、味原幼稚園での栽培エピソードが披露された。その他各所の写真報告もぶくめ、コメントーターの玉造福荷神社・鈴木伸廣さんとスペシャルゲストの着ぐるみマスコット「くるもんちゃん」から激励を受け、それぞれに笑いあり涙ありの経験を共有する場となった。栽培報告会後の交流会では、手づくり&オリジナルの夏のなにわ伝統野菜料理がテーブルせましと並び、種蒔きに始まり、開花・結実を経て収穫、そして食べることに育った命を共に味わうことによって、ネットワークの実感はいっそうリアルな感触を残すものとなった。

第15話のおわりに

U-COROPプロジェクト1年目に築いてきたネットワークと地域資源の蓄積を活かしながら、2年目の課題に向き合ったプログラムとして、「上町台地となにわ伝統野菜物語」をテーマに、ウィンドウ展示と栽培プロジェクトを連動させたネットワーク拡張の仕掛けと動きを追ってきた。人と地域のつながりをデザインするという命題に対して、なにわ伝統野菜という媒体が極めて高い潜在力を持っていることを認識できたが、その潜在力を活かしていくには、潜在力を発揮できる場の価値を見出していくことや、個別に存在する経験を共有する仕掛けをつくっていくこと

と。それらを通してネットワークを実感することが、ソーシャル・キャピタルの形成につながっていくことを予感させる機会ともなった。現時点では、客観的な評価を伴っているわけではなく、プロジェクトを主催する側の思いが強調されているかもしれないが、主催者の予想をはるかに上回る手ごたえがあったことは確かである。

U-COROPプロジェクト2年目の手ごたえは、これだけではない。1年目に築いたネットワークと投げかけたテーマが、地域に受け止められて波及していった事例も誕生している。「減災」の取り組みの活発化である。次号では、その動きをレポートしたい。

こうした手ごたえをもとに、萌芽が見えてきたネットワークの広がり福祉や減災の視点を重ね合わせ響き合わせていく試みを、U-COROPの3年目の課題として探っていく展望も見えはじめてきた。地域資源と人的資源の交流が醸し出す重層的なネットワークが、これからの暮らしとまちづくりを支える、福祉や減災、環境や文化一体のソーシャル・キャピタルを育てていくという思いを抱きながら。

(大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所 客員研究員)

- (1) NEXT21第3フェーズ居住実験の「環としての地域」ミニニケーションデザイン実験(U-COROPプロジェクト)の1年目の概要と評価は、季刊誌「CEL」83号・84号・86号、大阪・上町台地発 都心居住文化の創造(第12話、14話)で紹介。
http://www.wosakagas.co.jp/cei/pdf/cei_83_21.pdf
http://www.wosakagas.co.jp/cei/pdf/cei_84_21.pdf
http://www.wosakagas.co.jp/cei/pdf/cei_86_15.pdf
- (2) 大阪府と大阪市は2005年に認証制度を設け、現在は16種が大阪府の「なにわの伝統野菜」に、8種が大阪市の「なにわの伝統野菜」となっている。詳細は「なにわの伝統野菜」(森下正博、大阪府立農林技術センター、現在は大阪府立食とみどりの総合技術センター、2001)、『大阪市 なにわの伝統野菜』(財)大阪市農業センター)。
- (3) 玉造黒門越瓜の歴史は「玉造黒門越瓜」(玉造黒門越瓜出隊)にまとめられている。<http://www.inari.or.jp/uri/index.html>